

# 初めての幼稚園見学



立川多恵子

## はじめに

教育をもっとも単的なことばで表現すると、「子どもの発達を助ける」ということになる。そこで、教師の役割は、「子どもの発達を助ける人」ということになるのだが、問題なのは、助け方である。どんな助け方が子どもの発達にとってもっとも有効であるかは、子どもの内面性を理解することの出来ないものは論じる資格はない。

したがって、幼稚園教員養成においても、教育の方法論を打ち出す前に、子どもの内側の要求を理解することが大切になって来る。そのために、各養成校とも、さまざまな教育計画が用意されていると考える。

私の学校では、子ども側に立ってものを考えていく姿勢を身につけるため、子どもにふれることがまず必要であるとして、見学や観察を計画し、実践している。本稿では、学生にとって「初めての幼稚園見学について」報告する。

## 新入生の幼稚園観

本校の学生は、目的意識がはっきりしている。そのことよよしあしは他稿にゆずるとして、学生たちは、将来どんな職場で働くことを目的にして本校へ入学するのか知っておきたいと考え、ここ数年、最初の時間をさいて「幼稚園とは」というテーマでレポートを書かせている。

レポートの内容を大別すると、次の二つの傾向に分けることができる。

(一) 自分の通園経験から幼稚園をとらえている場合

学生Nの文を引用すると、「私の幼稚園時代を思い出すと、近所の友だちと手をつないで、小さなかばんにお弁当をつめて通ったことを思い出す。園では、みんなと一緒に先生のピアノに合わせて歌をうたったり、人形劇などを見ることができ、楽しかったように記憶している。絵を書いたり、工作をしたり……いろいろな思い出があるけれど、先生にほめてもらえるとということが一

番うれしかった」と述べている。

(一) 一般社会で通念化されている幼稚園を書いている場合

学生 Y は、「幼稚園とは、子どもが家庭という小さな社会を出て、初めて同年齢層の社会を作る場である。その集団の中で、子どもは小学校入学の準備をする。……中略、具体的な指導内容としては、おゆうぎ、お絵かき、粘土あそび等が考えられる」と結んでいる。

前者の場合は、自分の思い出の中に生きる幼稚園について書いているので、きわめて情緒的なとらえ方をしているのが特徴である。後者は、自分自身に通園経験のない場合が多く、概念的な表現が目立つ。こうした幼稚園観を、初期の段階に一旦、「何かで」ゆすぶってにおいて、幼児教育の原点から出発して貰いたいと考える。その「何か」が、本校の場合、初めての幼稚園見学である。

### 見学対象幼稚園の選定

初めての見学ではあるが、指導者側にはねらいがある。したがって、見学する幼稚園は次のような条件を満たしてくれるものとしている。

(一) 子どもが主体的に活動することの出来る保育形態

(二) 子どもが主体的に動いているので、子どものさまざまな活動が

見られ、見学の学生の視点が子どもの側にむけられる)

(一) 子どもとの消極的な接触を許可して貰える幼稚園

(子どもとふれ合うことが許されない場合、幼稚園の外側からみて批判的になる)

前記の二点を満たすことの出来る幼稚園を見学対象園として選定している。したがって毎年限られた幼稚園の御好意に甘える結果になってしまっている。

### 見学時間について

見学時間は、園児の登園時刻から昼食開始時刻までとしている。余り長時間にわたることは、見学に慣れない学生が疲労するばかりでなく、その日の保育を完全に妨害することになりかねないので、二時間余の見学時間にとどめている。

子どもたちが昼食を取っている間に、ホールで園長先生の話を伺ったり、質問に答えていただいたりしている。

### 保育形態への疑義

提出されたレポートを読んでもと、殆どのレポートが保育形態に注目している。自分の中にある幼稚園イメージと、見学幼稚園の形態的な相違を、冒頭に比較している場合が多い。

学生Aは次のように述べている。

「私の想像していた幼稚園という形をみごとに破られた気がした。私は幼稚園について、何時になったら教室（保育室）にみんなが集まり、挨拶をかわすのだろうと、そればかり待っていた。しかし九時半になっても、どのクラスもあつまる様子は見えない。自由に庭に出てあそんでいる子どもたち、教室に入って、一人でレコードをきいている男の子、数人で集って絵を書いている子どもたち、私はあっけにとられた。四歳児の教室に入って、そばにいた園児に『折紙はしないの』ときくと、『しないよ』という答えが返ってきた。私はなんて変わった幼稚園なんだろうと考え、室内を見廻した。しばらくその部屋にいたが、先生らしい人が現れないので、『先生はどこにいるの』と子どもにきくと、『あそこにいるよ』と庭のずつとすみをさして、平気な顔で答える。私は、ますますなんていう幼稚園だろうと考えた。……中略、園長先生のお話で、一応、その幼稚園の方針は理解することができたが、砂場がきらいな子は、ずっと砂場のよさを知らずに育って行くのをどう考えたいのか、嫌いな絵でも何枚も書いているうちに、楽しさを覚えてくるのではないだろうか……中略、半日しか見学していないので、この幼稚園のすばらしさがわからないのかもしれないし、私の頭にこびりついた型にはまった幼稚園の

姿が捨てきれないのかもしれない。今後、子どもを見る目を養うことよって解決して行きたい」と結んでいる。

初めての幼稚園見学なので、どうしても外側から見る結果になってしまっている。自分たちが描いていた幼稚園と形態を異にした園の見学が、学生たちの頭の中にあつたイメージをゆすぶり、その結果湧出した疑問が、学生たちに思考する機会を与え、子どもを見る目を養いたい」という方向に発展したことは、指導者側のねらうところである。

#### 子どもとのふれ合い

少数ではあるが、中には見学幼稚園で展開されている保育をそのまま受け入れて、子どもの活動に興味を持ち、子どもの心の動きや、それに対応する大人の役割を考え始めている学生もある。

学生Eは、次のように述べている。

「五歳児の部屋に入ると、子どもたちがいろいろ活動をしている。……中略、すみの机で、赤いイチゴのとなりに緑色のイチゴを描いている子どもに、『あおいイチゴね』と声をかける。『うん、もうじき赤くなるよ』といわれて、はっとする。子どもたちは絵を書きながら、いろいろなことを思いめぐらしていることを知った。さっき見て、『変だな』と思った水色のお日様も、もし

かしたら、雨が降り出しそうなのかもしれないと思うと、子どもの気持を大事にするには、子どもの中から生まれ出ようとしているものが何であるかを考えてみる事ができなければならないと考えた。……後略」

また、学生Fは、次のように書いている。「四歳児の部屋では、友だちが子どもたちとあそんでいた。わたしもどの子とあそぼうか考えていると、一人の男の子がブロックを見せにきた。床にしゃがんでみていると、女の子が「カステラどうぞ」というので驚いた。気をひくために私のそばでブロックをいじっていたら、なんとなく四角いものができたので、カステラどうぞといったのか、私にカステラを御馳走したくて作り始めたのか、どっちかなと考えた。しかし、その意味がどうであつても、わたしとしては、カステラを御馳走してくれた子どもの厚意を素直に受けとめることが、その時は大切だったのだと感じた……後略」

学生Eの記録は、子どもに何げなく投げかけたことばの波紋から、外側に見えるものと、内側にあるものとの違いに気づき、子どもの内側にあるものを考える大切さを指摘している。

学生Fの記録は、子どもの行動をこまかく観察し、その意味を知ろうとする分析的な観察より、子どもをそばに居る人間として、子どもの気持を快く受容することの大切さに気づいている。

初めての幼稚園見学では、一般に学生は保育形態に注目してしまふ傾向があるが、中には一歩踏みこんで、子どもの内面を知ろうとする学生もいる。

子どもと接触する機会を得て、子どもの内面にふれ、感動したE、子どもを理解することが、子どもの内面を分析的に見ていくことばかりでないことに気づき、一時でも、子どもと生活を共にする大人の役割を考えるF、二人は「子どもの気持を大切にすゝ」という保育の心を、すでに持ち合せている。

## むすび

初めての幼稚園見学は、養成のプロセスの中で、すでに大きな役割をなしている。

学生は、入学時にいだいていた幼稚園イメージを一度くずすことによつて、子どもの内面を理解することの大切さに気づく。

この見学の後、本校では、子どもとのふれ合いを通して、子どものことをもっと知りたいという学生の要求を、そのまま受け入れて長期観察に入る。

その結果、子どもとのふれ合い、子どもの行動を共感的に考える中で、自分たちの役割を確認し、「子どもの発達を助ける」という本当の意味を知ることになる。

(埼玉県立教員養成所)